

「日本人の宗教性とキリスト教」

保 科 隆

はじめに

伝道者として歩んだ道を振り返って感謝しつつ思うことがあります。一人の
人と二つの地域との出会いです。その出会いがあって、「日本人の宗教性とキ
リスト教」という生涯の課題が与えられました。一人の人については、東京神
学大学に入学以前にまだ未信者であった時の大学時代の恩師です。所属してい
た文学部の専攻科目ではなく教養科目の英語の教師でしたが、浄土真宗本願寺
派の寺の住職でもありました。その人を通して親鸞の書物の『教行信証』や
『三帖和讃』や弟子の唯円が書いた『歎異抄』などと出会いました。対面の一
対一で教えられたことも多くあります。東京の多摩市にある寺にも何度も通い
ました。親鸞の書物から日本人にとっての宗教はどのようなものかを考えさせ
られたのです。

二つの地域については、東京神学大学を卒業後に伝道師として赴任した関西
の地域と、按手を受けて牧師として次に遣わされた北陸の地域です。関西、北
陸の二つの地域との出会いは東京で生まれ育ち、東京しか知らなかった私に地
域の中に生きている宗教や日本人が古くから持っている信仰とはどのようなも
のかを考える機会を与えてくれました。関西では、西宮に住みましたが、よく
利用した阪急電車の駅の名前に「門戸厄神」とか「清荒神」とかがあります。
神社の名前です。また、北陸は福井の吉崎御坊に浄土真宗中興の祖といわれる

蓮如がいたこともあり浄土真宗が盛んな地域でした。西本願寺や東本願寺の別院が建てられています。門徒の数が多いからです。私が出た富山県高岡の教会の周辺にも宗派を問わずたくさんの寺がありました。この二つの地域に生きる人々との出会から浄土真宗を含めた日本の仏教と、自然宗教と分類される神道も含めた民間宗教、さらに日本語の問題、習俗、そして日本文化の問題を広く自分の問題として受け止めてそれまでより以上に考えるようになりました。

第一章 日本人の宗教性について

A、遠藤周作の場合 「深い河」 に示される生まれ変わりの信仰

遠藤周作の文学作品から日本人の宗教性について考えます。遠藤周作の最後の小説「深い河」に記される中で中心にあるものは生まれ変わりでです。遠藤周作は若いころにフランス留学から帰国して、「白い人」「黄色い人」「海と毒薬」などの小説を出版しました。子供のころに母親と一緒にカトリック教会で洗礼を受けキリスト教徒でもあった遠藤周作はその後「沈黙」「死海のほとり」「イエスの生涯」「侍」などを出版します。これらはキリスト教と関連したテーマを取り上げた作品と考えられます。それから、1996年に亡くなる少し前の1993年、70歳の時に最後の小説「深い河」が世に出ました。この作品こそ遠藤文学の到達点です。

この小説の最初の部分で中年サラリーマンの磯部と名乗る人物の妻の言葉として、「生まれ変わり」が初めて語られます。

<磯部は妻の口に耳を近づけた。息たえだえの声在必死に途切れ途切れに何か言っている。「わたくし、…………必ず…………生まれ変わるから、この世界の何処かに。探して、…………わたくしを見つけて…………約束よ、約束。」約束よ、約束よという最後の言葉だけは妻の必死の願望を込めたのか、他の言葉より強かった>^(注1)

「生まれ変わるから」の言葉を残して磯部の妻はがんで死んでいくのですが、『深い河』は、この言葉をめぐって様々な人々がかかわりを持つ物語と言えます。また、死ぬ20日ほど前に妻が記した日記が見つかります。そこにはボランティアとして磯部の妻を病院で看病していた成瀬美津子と磯部の妻の対話が記されています。その対話の一部です。

＜「成瀬さん、生まれ変わりを信じますか」

「生まれ変わり……………」

「人間は一度、死ぬと、またこの世に新しく生まれ変わるって本当」

成瀬さんはこの時、一瞬、わたくしを直視したが、うなずきはしなかった。

「わたくし、生まれ変わって、もう一度、主人に会える気が、しきりにするんです」

成瀬さんは黙って窓の外に目を向けた。」> ^(注2)

『深い河』は、最初の部分で小説の主題が提示されており、その後に登場する人物たちは、それぞれに「生まれ変わり」についての思いを持ちながらインドツアーに参加する物語です。最初に登場する磯部はがんで妻を亡くしてからインドツアーに参加しています。磯部の他にも自分が手術を受けたときに九官鳥を死なせてしまった沼田という人物もツアーに参加していますが、鳥の九官鳥も生まれ変わるということでしょう。なぜインドツアーなのかについても、インドには古くから転生という考え方があると遠藤周作は考えていたので、インドを妻が生まれ変わる場所として選んだのです。遠藤周作の考えでは人間だけが生まれ変わるわけではありません。九官鳥などの鳥も生まれ変わるのです。

次に、磯部がインドツアーに参加してからのことを記します。磯部と成瀬美津子との対話の場面です。

＜「磯部の言葉には実感があつた。人生には予想もつかぬこと、わからぬことがあるのだ。自分だってなぜ、印度に来る気になったのか。確実にはわ

かっていない。彼女は時々、人生は自分の意志ではなく、目には見えぬ何かの力で動かされているような気さえする。」

「成瀬さんのほうは、なぜ、印度に」

「いけませんか、印度じゃ」

(略)

「わたくし、あの頃」と美津子はぼつんと言った。

「奥様に聞かれたことがありますの」

「何を………」

「人は死ぬと………また生まれ変わるだろうかって」

(略)

「生まれ変わり、わたくしにはわかりません」と美津子はその時一語一語を区切って心の中でゆっくりと自分に言った。

「死ねばすべて消える、と思ったほうが楽だわ。いろいろな過去を背負って、次の世に生きるよりも」

磯部の妻の顔がゆがんだのも記憶にある。

(略)

「それで…磯部さんはこの名前の村に探しにいらっしゃるのですか」

「ええ」

「転生を信じていらっしゃいますの、ヒンズー教徒のように」

「わかりません。妻が死ぬまでは、そんな死後のことなどまったく無関心でした。死のことさえ考えたこともありません。でも、あいつが息を引き取る前日、言った一言が………心の糸に引っかかって落ちないんです。>^(注3)

磯部と成瀬美津子との対話を通して示されるのは、なぜ磯部は生まれ変わった妻に会うためにインドまで来ていたかです。妻が死ぬ間に自分の耳元で言った一言が原因だったのです。「必ず生まれ変わるから、探してね」妻のこの言葉があり磯部のインドツアーがありました。磯部を突き動かしたインドへ行くとの思いは、それまでの思いとはちがう方向に向けられていることが次の

ような言葉で分かります。

「タクシーが来た。その熱いシートに腰を下ろしたとき、苦痛にも似た動悸を感じた。彼は妻が生きている間、死後の転生など一度も考えたことはない。そしてあの妻の叫びによって、不意に大きな車が眼前に飛び込んで、こちらの人生の方向も先行も変えるように、再生とか転生という二文字が出現したのだ。そのくせ磯部はまだ半信半疑だった。(略)

確実なのはあの時の妻の声だけだった。信じられるのは心のなかにかくれていた妻への愛着だった。そして今、ここに誰かから、もし来世があって再び結婚するかと問われれば、今の磯部は即座に妻の名を口にしたにちがいないかつた。」^(註4)

ここに記されるような死後に関する感覚は、日本人の庶民感覚かもしれません。例えば、生まれ変わったらもう一度妻と結婚したいとの思いです。夫婦の間は2世といわれると遠藤周作はこの書物で記します。死後についてのアンケートの結果にも、かなり多くの人たちが生まれ変わったら今の妻と結婚したいと答えているようです。日本では「生まれ変わり」という言葉で、インドでは「再生」や「転生」という言葉で語られているものとは同じです。来世などという言葉も磯部の思いとして語られています。結局『深い河』のテーマ、「生まれ変わり」の結論は、次のような木口と成瀬美津子との対話の中にあります。

「成瀬さん、印度人はこの河に入ると、来世でよりよく生きかえると思うているそうですね」「ヒンズーの人たちはガンジス河を転生の河と言っているようです」^(註5)

遠藤周作にとって、深い河とはインドのガンジス河です。インドの人たちは、ガンジス河に死んで遺体が流されることによって生まれ変わることができ

ると信じるのです。だから妻を探すための磯部のインドツアーが必要とされます。「深い河」では、大津という名前で登場する人物のモデルとされる、カトリック教会の井上洋治神父は、遠藤周作と同じ船に乗って1950年にフランスへ渡りました。そして遠藤周作の死後に出版された『遠藤周作の世界』の中の対談において次のように語っています。

「やっぱり母性の強い神。その母性の強い神をイエスが映している。イエスの母のような広い心を強調している。それは、私の見方では、「だぶだぶの服を仕立て直す」という彼の表現でいえば、仕立て直しの第一作は『沈黙』で、その後『死海のほとり』から最後の『深い河』まで多分来ているんだろうと思う」。(注6)

遠藤文学は、母性の協調とはよく言われているところです。(注7) また、日本人に合うような洋服の仕立て直しがされているともいわれます。伝統的なキリスト教の教義は日本人には受け入れられないとの考えがあるからです。当然、問題もあります。生まれ変わり死に代わる世界は循環論になります。最後の審判の面がありません。したがって歴史的世界への視点がなく終末論がありません。文学の言葉で終末論をどのように表現するのかは別にして信仰の問題として終末を考えねばなりません。

井上洋治がモデルの大津の語る言葉として注目すべきなのは次の言葉です。これもまた『深い河』の結論のような言葉です。

「修道院で三人の先輩に問われて、ほくはうっかり答えたことがあります。「神とはあなたたちのように人間の外にあって、仰ぎ見るものではないと思います。それは人間の中にある、しかも人間を包み、樹を包み、草花をも包む、あの大きな命です」。(注8)

ここで言われる神とは人間も樹も草花も包む「大きな命」です。この大きな

命の発見こそ遠藤文学の到達点であり、死者の生まれ変わりを可能とする深い河との考えでもあります。

B、柳田國男の場合「生まれ変わり」の信仰 民間伝承に伝わるものとして

柳田國男の晩年の著作『故郷70年』から引用します。

「たびたび生まれかわる観念として、クルマゴ（車児）ということがある。子供が生まれて一年たたないうちに死んで、その翌年また生まれかわることがあると、それをクルマゴという。中にはクルマゴ12人目だなんていう話もあるほどで、何か母親の体質に特徴があって、そうなったのかもしれないのを、そうは考えないで、生まれても気に入らんからまた帰って、また出直す、そういうのをクルクル回って生まれてくるのがクルマゴと呼ばれる理由である。クルマという言葉が今とは大分ちがうのである。生まれかわりということを誰もごく普通にみていたことがよく分かる。(略)

ただ漢学や国学をやっている連中の側だけは、かえって書物にわざわざされて、何のことも判らないままに、『地下の霊』とか『在天の霊』とかいって来たわけであった。この点は本当にどうかして両方を共通にして、どちらかが考え違いであるとか、判断が誤っているのではあると、あるいはまた、ある程度まで無学な者の気持ちも認めてやらなければならないとか、しなければならぬ。』^(注9)

「日本人の信仰のいちばん主な点は、私は生れ更りということではないかと考えている。魂というものは若くして死んだら、それっきり消えてしまうものでなく、何かよほどのことがない限りは生れ更ってくるものと信じていたのではないか。昔の日本人はこれを認めていたのである。かえって仏教を少ししかじった人たちや、シナの書物を読む階級が、はっきりしなくなったので、文字のない人たちは認めていたのである。(略)

例えばこんな話がある。私の祖母の弟で、松岡弁吉という、たしか六つぐ

らいで死んだ人があった。大変幼いころから字を覚えたりして、利発な子供であったらしい。あるいは眼がくりくりしていたのか、私の父が生まれたとき、ああ弁吉の生れ更りだ、と誰からもよくいわれたというのである。」^(注10)

柳田國男は、晩年の83歳になって出版した『故郷70年』で初めて「生まれ変わり」について記すのでありません。初期の1910年（明治43）『遠野物語』において既に「生まれ変わり」についての伝承を記しています。『遠野物語』の99にある話で、遠野の土淵村の助役北川清という人について次のように記します。村の助役の北川は1906年（明治39）の三陸大津波で妻を亡くしましたが、夏の初めの月夜の晩に便所に行ったときに、霧の中から現れた生まれ変わりの妻と再会します。

さらに、柳田國男は戦後すぐに書いた『先祖の話』の中でも77のところ「生れ替り」との項目を設けています。『先祖の話』は1945年の敗戦の年から書き始められていて柳田國男が戦争で命を落とした日本人のことを思いながら書いたものと言われています。1946年に出版されました。『先祖の話』については、柳田民俗学の研究者の鶴見和子が次のように述べています。

「戦後連合国によって、戦犯として処刑された旧日本軍人 700 名の遺書を分析したところによると、183 名が肉体は外地で死んでも、その魂は祖国の家族のもとにかえり、永久に祖国または家族を守るであろうと、いつている。またそのうちの 30 名は、生れ替って日本の社会の再建に働きたいといつている。すべて戦前の教育を受けた人々だから、このような結果がでるのもふしぎはないかもしれない。いずれにしても、柳田が『先祖の話』で書きとめたように、死者と生者との交通と、生れ替りの思想が、はっきりあらわされている」。^(注11)

死んでも祖国を守るとの考えは靖国神社の問題ともかかわることです。また、柳田國男がなぜ『先祖の話』を書く必要があったのかがよくわかります。

さらに「先祖の話」から引用します。

「顕幽二つの世界が日本では互いに近く親しかったことを説く為に、最後になほ一つ、言ひ落としてはならぬのは生まれ変わり、即ち時々の訪問招待とは別に、魂がこの世へ復帰するといふ信仰である。(略)一つの要点は六道輪廻、前世の功過によって鬼にも畜生子にも、堕ちて行くといふ思想は日本には無く、支那が或は輸入国では無かったかとも見られる。我邦では人の霊が木に依り、巖を座とするのは祭りの時のみで、物にもそれぞれのタマは有ると見て居たが、それが人間の方から移って行ったといふことを、考へて居る者は今でもさう増加しては居ない。(略)

その一つは生きて居る間でも、身と魂とは別のもので、従って屢々遊離する。それが一種の能力のようなもので、成長してからも魂が独り遠く生き、用を足してくるといふ人が折々は有り、殊に死にさきだつて会いたいと思ふ人を訪れるという話は多い。夢に飛び歩くと見ることのできる人を、仙北では飛びだましいと謂ひ、死前に人を訪ふものを津軽ではあま人と呼んで居て、何れも一方にはそれを見る力を持った者、職業の徒以外にもあった。東北以外でも此話はよく聴くが、今では皆之を死後の霊に限る如く、考へて居るのは一つの変化であろう」。(註12)

柳田國男が考へていた魂が此の世へと復帰する「生まれ変わり」は日本の民間伝承に伝えられたものとしてあります。すでに記した「遠野物語」99に記される伝承はそれを示しています。柳田は仏教の教えの六道輪廻や前世の思想とは異なるところで日本の庶民の感覚の中に生きてきた「生まれ変わり」の信仰を考へていました。何度もいろいろな箇所、仏教や漢学を学んだ者たちがそのような庶民のもつ生まれ変わりの信仰を無視して曖昧にしたと批判しています。言葉としては庶民ではなく柳田民俗学では常民(じょうみん)という言葉を用います。(註13)戦後に発表された「魂の行くへ」のなかには自分自身の中に生きている死後への思いとして次のような言葉があります。

「魂になっても生涯の地に留まるという想像は、自分も日本人である故か、私には至極楽しく感じられる。出来るものならば、いつまでも此国に居たい。さうして一つの文化のもう少し美しく開展し、一つの学問のもう少し世の中に寄与するやうになることを、どこかささやかな丘の上からでも、見守って居たいものだと思う」^(注14)

柳田國男は自らを「日本人である故か」と語ります。遠藤周作のようにガンジス河まで行ってそこでの生まれ変わりを考えていたのではありません。日本人はインドに起源を持つ仏教や中国の儒教や道教といったような漢学が入ってくる以前から死後の生まれ変わりを信じていたのだと柳田國男は考えていたのです。

第2章 日本人の死後観

A. 平田篤胤の場合 「靈の真柱」に示される死後観

民俗学者の柳田國男に大きな思想的影響を与えている江戸時代後期の国学者、平田篤胤の「靈の真柱」の中から引用します。

「しかれば、亡靈の、黄泉の国へ帰くてふ古説は、かにかくに立ちがたくなむ。さもあらば、この国土の人の死にて、その魂の行方は、いずこぞと云ふに、とことわにこの国土に居ること、古伝の趣と、今の現の事実とを考へわたして、明らかに知られるども、(略)

そもそも、その冥府といふは、此顕国をおきて、別に一処あるにもあらず、直ちにこの顕国の内いずこにも、有なれども、幽冥にして、現世とは隔たり見えず。故もろこしの人も、幽冥また冥府とは云へるなり。さて、その冥府よりは、人のしわざのよく見ゆるを、顕世よりは、その幽冥を見ることあたはず」。^(注15)

「また同じ道ゆく人どちは、死りて後も、その魂は、一処に群れ集ひ、互に助けなすことにて、」^(注16)

平田篤胤には隠世（かくりよ）と顕世（うつしよ）との考え方があります。かくりよは冥府とも幽冥とも記され、また、うつしよは現世とも記されています。要するに隠世は死後の世界、顕世は生きている世界です。そして死んだ後も「一処に群れ集ひ、互に助けなす」世界があるというのです。これは死後の世界もこの世の世界も変わらないことを示す考えです。紙一枚で仕切られているような違いがあるだけです。この点については、久野昭が『日本人の世界観』の中でつぎのように述べています。

「日本人にとって、この意味での他界は、ほとんど現世と隣り合わせといってもいいくらいに、意外に親しい世界でもあった。たとえば、私たち日本人は他界をあの世とよぶ。そのとき、たしかにこの世と区別してあの世とよんでいるに違いない。ただし、あの世と聞いただけで、今さらどの世かと聞き返す必要もなく、ああ、あの世かと理解できる程度の親しみを、私たちはあの世に対して抱いている。」^(注17)

日本人にとってあの世とは、時代による考え方の変化はあるとしても親しみやすいところだという感覚は今も残っているのではないのでしょうか。

平田篤胤がまた、「魂の行方はとことわにこの国土に居ること」と言っていることも大切な点です。柳田國男が「魂の行くへ」の中で、どこか国土の丘の上から子孫の営みを見守って居たいというのも同じ考えです。死後の魂は日本の国土から離れないと両者とも考えていました。柳田國男への平田篤胤からの影響がみられるところです。このような平田篤胤の説く「死後観」については、『霊の真柱』を校注した子安宣邦は巻末の解説において次のように述べています。

「篤胤の説く幽冥の観念は、祖霊や産土の神をめぐる伝統的な共同体における宗教観念に接近するものといえる。またやがて近代の柳田国男らによって説かれる民俗世界における祖先観にも類似する」^(注18)

このような平田篤胤の死後観は、「千の風になって」の歌の歌詞にも示されるところです。「私のお墓の前で、泣かないでください。そこに私はいません。死んでなんかいません。千の風になって、千の風になって、あの大きな空を吹きわたっています」このような歌の歌詞の中に死後の復活を信じるようなキリスト教信仰の世界が見えてくるものとは思えないのです。なぜなら「死んでなんかいません」という世界です。平田篤胤のいう「とことわにこの国土に居る」と共鳴するものがあると思います。

B. 本居宣長の場合 「答問禄」と「遺言書」に示される死後観

「答問禄」は本居宣長が門人たちの質問に対して答えたもので56項目からなっています。1835年に出版されました。江戸時代の同じ国学者であっても平田篤胤とは異なった本居宣長の死後観が記される書物です。

「人は死候へば、善人も悪人も押しなべて、皆よみの国へ行く事に候、善人とてよき所へ生まれ候ことはなく候、これ古書の趣にて明らかに候也、然るにかくの如くのみ申しては、儒者も仏者も承引いたさず、いと愚かなる事のやうに思ひ候、(略)

さて其よみの国は、きたなくあしき所に候へ共、死ぬれば必ゆかねばならぬ事に候故、此世に死ぬるほどかなしき事は候はぬ也」^(注19)

江戸時代の同じ国学者であっても死後の魂の行方についての考え方が、平田篤胤と本居宣長では異なっていることが分かります。本居宣長は、人は死ねば善人悪人の区別なくみな黄泉の国という「汚き悪しき所へ行く」と考えていました。すくなくとも門人たちの質問に対しては、そのように答えています。と

ころが、本居宣長には「遺言書」が残されており、自分の死後をどのようにするか門人たちに対して絵入りの細かな指示を記しています。そこでは、自分の墓について「詣り墓」と「埋め墓」とを分けるように指示しています。三重県松坂市の郊外にある石室山に指定している埋め墓には「奥津紀」と記しその墓の寸法や桜の木を植えるようにと記します。^(注20)これは、両墓制に当たると考えられます。この点について加藤周一は宣長の謎の一つと述べて、その問題点を指摘しています。

「第一の謎は、生涯の著作を挙げて、儒仏を排し、「神ながらの道」を説いた宣長が、その晩年に写経をくり返し、神道の墓の他に、仏式の墓を造ることを遺言したのは、何故か、ということである。仏式の墓を世間体とする解釈は、写経の日課を説明しない。小林秀雄が『本居宣長』のなかで説いた「両墓制」の議論は、見当違いである。「両墓制」は神道の枠の中での習慣であり、神道式と仏式とを併用した宣長の発想とは、全くちがう」。^(注21)

加藤周一のいう宣長の仏式の墓は、今日の松阪市内の樹敬寺の境内にある。その指示も「遺言書」のなかに記されている。それと宣長は晩年になってから写経を繰り返していたというのは意外です。これを、人間には誰しも二面性があると済ませてよいものかです。加藤周一は、さらに続けて次のように記します。

「南京陥落にわきかえった提灯行列の東京を、思い出す。日本国民は、戦争の単なる犠牲者であったらうか。もちろんその面もあった。しかし同時に、進んで軍国主義を歓迎し、他国の人民におどろくべき犠牲を強いる面もあった。その一面についてのみ語り、他面を無視する傾向が、今日の日本の状況と深く関係することはいうまでもない」。^(注22)

宣長の神道式墓と仏式の墓の両方を造るようにとの遺言は、日本人のもつ心の二面性を示し、それは歴史認識にも現れるとの加藤の見解です。

第3章 キリスト教の立場から

キリスト教の死後観について考えてみます。遠藤文学の到達点であり、また柳田國男が初期の著作から晩年に至るまで取り上げていた「生まれ変わり」の考え方や平田篤胤や本居宣長に示される死後観をキリスト教の立場から考えてどのようにみるのかです。

聖書のなかには「生まれ変わり」ではなく「新しく生まれる」という考え方が示されています。ヨハネによる福音書の中の次のような言葉です。

「イエスは答えて言われた。はっきり言うておく。人は、新たに生まれなければ、神の国を見ることはできない。」(ヨハネ福音書3章3節) 新たに生まれることと「生まれ変わる」は同じではありません。「新しく」が大切です。そして興味深いのは対話の話し相手であるファリサイ派ニコデモの対応です。「もう一度母親の胎内に入って生まれることができるでしょうか」と言っています。このニコデモの考え方が「生まれ変わる」ということなのです。柳田國男の言う自分の父親が弁吉の生まれ変わりと言われていたのは、ニコデモの考えの通りのことが起こっているのです。肉体を持ってもう一度生まれ変わることが起こるのです。そのように信じるのです。また別な視点ですが、パウロの次の言葉も思い浮かびます。「だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです」(Ⅱコリント5章17節) パウロの語る新しさは、キリストと結ばれている新しさです。時間的に新しいか古いかではありません。また、共観福音書が記している復活についての問答の言葉の中では「死者の中から復活する時には、めとることも嫁ぐこともなく、天使のようになるのだ」(マルコ福音書12章25節)と語られています。復活は大きな問題ですが、日本人がこれまで考えて来たような意味で「生まれ変わり」を信じてきたことと復活は同じではありません。復活の世界は「めとることもなく嫁ぐこともない」世界です。今度、生まれ変わっても今の妻を妻に迎えるというような世界ではありません。その存在のあり方は、「天使のようになる」のです。

教団の式文として（試用版）2006年「埋葬の祈り」と「記念式」の祈りの言葉として示されるものについては問題を感じます。埋葬の祈りの中に「やがてわたしたちもみもとに召され、兄弟姉妹と再会する時を迎えますが」とあり、死後の再会についての祈りの言葉があります。このような再会の言葉について祈るときにその再会をどのように考えているのでしょうか。また、記念式の祈りの言葉の中では「やがて御国において、再び兄弟姉妹と出会う日を待ち望みつつ、わたしたちに与えられた日々を」が入っています。「御国において、再び兄弟姉妹と出会う日」の御国とは何でしょうか。主イエスの居られるところとの考えがはっきりと自覚され祈られているのでしょうか。仏式の葬儀に出ていて驚くことがあります。遺族の代表のあいさつで死んだ父や母が天国に行きました、と平然として語ったりするのです。

第4章 むすび

民俗学者の赤田光男の『祖霊信仰と他界観』の中の言葉を記します。

「死霊は次第に祀られることにより清まり、精霊、祖霊となると信じられている。ところが祖霊化しない前に、死霊が誰かの体に入ってこの世へ再生することがあると考えられた。この生まれかわりの思想は祖父母が孫になって生まれかわるという伝承にもうかがわれる。七歳未満の子が死ぬと、大人の墓とは別の小墓に埋める風習があるが、これはこの世に死霊をとどめておいて、機あらば明日にでも再生してくるよという親心としてであった。逆説的にいえば、そうした再生観があったから母子心中や間引、自殺がよくおこなわれることになる。あの世とこの世は連続的にとらえられていた。（略）死霊が別人となって生まれかわるという以外にも、人間以外の動物、鳥、神になるとする伝承もある。再生観はまさに靈魂不滅思想の典型例であり、過去、現在、未来を一体的にとらえ、あの世とこの世を連続とみなすわが国民の共通認識であった」^(注23)

日本人は、たしかにあの世と此の世とを連続的に考えています。遠藤周作の『深い河』でいえば大きな命は靈魂不滅の考え方と結びつくように思います。魂は死なず不滅です。

靈魂不滅思想は、柳田國男で言えば「生まれ変わり」を信じる信仰です。誰が言った言葉か忘れましたが、その方はある方の死に際して「ちよつといてくるね」と言って亡くなられたことを感激したと語っていました。「またすぐに帰ってくる」という意味もこめられているのです。これは理屈ではないでしょう。感情の問題です。赤田の言葉で言えば「常民の共通認識」です。キリスト教の伝道も、このような日本人の共通認識と向き合い対話をしながら考えていくことが求められているのではないのでしょうか。

(ほしな・たかし)

〈注〉

- 1) 遠藤周作『深い河』講談社 1993年 24ページ
- 2) 遠藤周作 前掲書 29ページ
- 3) 遠藤周作 前掲書 178ページ以下
- 4) 遠藤周作 前掲書 249ページ
- 5) 遠藤周作 前掲書 320ページ
- 6) 中村真一郎他 『遠藤周作の世界』朝日出版社 1997年 203ページ
- 7) 河合隼雄 『母性社会日本の病理』中央公論社 1976年 9ページ以下に次のように記している。「母性の原理は包含する機能によって示される。それはすべてのものをよきにつけ悪しきにつけ包み込んでしまい、そこではすべてのものが絶対的な平等性をもつ。わが子であるかぎりすべて平等に可愛いのであり、それは子供の個性や能力とは関係ないことである。しかしながら、母親は子供が勝手に母の膝下を離れることを許さない。それは子供の危険を守るためでもあるし、母—子—一体という根本原理の破壊を許さぬためといってもよい。このようなとき、時に動物の母親が実際にすることがあるが、母は子供を呑みこんでしまうのである。かくて、母性原理はその肯定的な面においては、産み育てるものであり、否定的には、呑みこみ、しがみつきして死に到らしめる面をもっている」。心理療法家の河合が指摘しているように母性には肯定的な面と、否定

的の面の両面があることを遠藤文学を読む場合も考える必要がある。

- 8) 遠藤周作 前掲書 187ページ
- 9) 柳田國男 「故郷70年」『柳田國男全集』21 筑摩書房 1997年 311ページ
- 10) 柳田國男 前掲書 313ページ
- 11) 鶴見和子 『柳田國男集』筑摩書房 1975年 453ページ
- 12) 柳田國男 「先祖の話」『柳田國男全集』15 筑摩書房 1998年 142ページ
- 13) 芳賀 登 『柳田國男と平田篤胤』皓星社 1997年 292ページ以下で次のように述べている。「柳田が常民という概念を使用した最初は、イタカおよびサンカと区別してつかわれている。いいかえると木地屋と区別されてつかわれたものである。山人とちがって里方にいきる人々をさすものとされ、行人や毛坊主や山人などとはことなった普通の百姓、平民、常人、凡人をさすとされたのである。」
- 14) 柳田國男 「魂の行くへ」『柳田國男集』筑摩書房 1975年 288ページ
- 15) 平田篤胤 『靈の真柱』子安宣邦校注 岩波書店(岩波文庫)1998年 165ページ以下
- 16) 平田篤胤 前掲書 182ページ
- 17) 久野 昭 『日本人の他界観』吉川弘文館 1997年 2ページ
- 18) 平田篤胤 前掲書 224ページ
- 19) 本居宣長 「答問祿」『本居宣長全集』第一巻 筑摩書房 1989年 526ページ
- 20) 本居宣長 「遺言書」『本居宣長全集』第二十巻 筑摩書房 1990年 227ページ
- 21) 加藤周一 「宣長・ハイデッガ・ワルトハイム」『夕陽妄語』筑摩書房 2016年 225ページ
- 22) 加藤周一 前掲書 228ページ
- 23) 赤田光男 『祖霊信仰と他界観』人文書院 1987年 33ページ